

6年生を送る会がありました

2月26日(金)の2,3校時に6年生を送る会がありました。体育館で行う場面もあるので寒さが心配でしたが、当日は温かい日和に恵まれ楽しく思い出深い送る会になりました。送る会のねらいは、次の2つだと思います。

○6年生に感謝の気持ちを表し、小学校時代の良い思い出を作ってもらおう。

○6年生に代わり、新しく敷島北小を率いる5年生(4年生)が中心になり、この会を企画し、運営することで5年生のリーダーとしての力を伸ばす。

このねらい達成のため、次のようなプログラムで送る会が実施されました。

第1部(各教室で縦割り班毎に行います)

①6年生と遊ぼう(室内ゲームをして一緒に楽しい時を過ごします)

②6年生との思い出プレゼント(6年生に縦割り班全員からの寄せ書きを渡します)

第2部(全員が体育館に集まり行います)

①6年生入場

②ステージバッグ披露

③6年生クイズ

④和太鼓発表

⑤6年生から

⑦全校合唱「さよなら」

⑧6年生退場

この中で、「ステージバッグ」と6年生クイズについて紹介します。

○ステージバッグ

本校では体育館にステージバッグが飾られています。6年生が卒業記念制作としてステージバッグのような飾りを制作する学校は多いのですが、本校では5年生が中心になり制作しています。これは、これからの1年間、このステージバッグの前で全校のリーダーとして様々な活動をしていく5年生の意気込みを示すものです。また、最高学年として活動していく1年間、このステージバッグを見ることで、最高学年としての誇り、責任感を忘れず活動していく、というねらいもあります。

○6年生クイズでは、6年生にちなんだクイズをしました。例えば、

・6年生が好きな給食は「きなこパン」である。○か×か。

とか、

・6年生が好きな教科は「体育」である。○か×か。

というようなクイズです。

クイズを通して6年生がより一層身近に感じられるようになりました。

ステージバッグ披露



和太鼓クラブの発表



オリンピックの感動ありがとう

バンクーバー冬季オリンピックの熱戦が終わりました。日本は銀メダル3個、銅メダル2個と健闘しました。遠いカナダの大地で繰り広げられる熱戦が、瞬時に茶の間に伝わり、多くの国民がテレビに釘付けになりました。そして、この期間は多くの国民が(普段はあまり意識しない)日本人としての意識に目覚め、自国の選手の活躍に一喜一憂し、メダルを取ると自分のことのように喜びます。

このように、オリンピックに代表されるスポーツには私たちが夢中にさせる不思議な力があります。国別対抗ということで国民としての一体感が持てる、愛国心が育つ、という面もありますが、それ以上に、オリンピックという人間ドラマに私たちは感動を覚えます。今回のオリンピックでは、どんな選手が心に残りましたか。浅田真央選手、高橋大輔選手、上村愛子選手、心に残る選手は人それぞれでしょう。

私は、スピードスケート女子団体追い抜きで銀メダルに輝いた3人の選手と補欠の高木選手、そして、この種目の日本代表コーチの羽田さんの姿、生き方に感動を覚えました。

女子団体追い抜き(パシュート)は、ほとんど知られていない種目です。実は私もこのような種目があることを知りませんでした。実際、オリンピック前にはマスコミでもほとんど注目されず、メダル獲得の期待もされていなかったように思います。

この競技内容を説明すると、3人一組でチームをつくり、女子は400メートルリンクを6周します。(男子は8周)対戦相手は同じリンクを反対に回ります。そして、3人の中の最後の1人がゴールした時のタイムで勝敗を決めます。日本チームは韓国に4秒もの大差をつけて勝ち、順決勝でポーランドに競り勝ち、決勝の相手は前回のオリンピック覇者ドイツです。はじめわが国がリードしていましたが、最後に追い上げられ0.02秒差で敗れ惜しくも2位でした。本当に紙一重の差で2位でしたが、世界に一番近い力を持っている種目といって良いでしょう。

テレビでは、チリ地震による津波放映が中心となり、詳しい様子は分かりませんが、素晴らしい頑張りでした。特に、今でも心に残るのは、表彰式が終わり銀メダルを手にした3人の選手が補欠の高木選手の首に銀メダルを掛けるシーンです。競技には3人が出場するわけですが、事故に備えて補欠の選手も同じように練習し備えます。でも、補欠の選手は、競技に出なければ、メダルをもらえません。補欠の選手は、チームの為、万が一に備え黙々と練習します。そのひたむきに努力する姿が心を熱くします。そして、メダルを取り、仲間で喜び、自分たちを支えた補欠の仲間感謝する姿が感動をよびます。

それと共に、この銀メダル獲得のドラマには山梨県出身の羽田コーチが大きな存在感を示しています。山梨日々新聞3月1日(20面)では次のように伝えていきます。

(以下引用)

高校を出て以来指導してきた田畑真紀選手と穂積雅子選手が、スピードスケート女子団体追い抜きで銀メダルを取った。(金メダルが取れず)惜敗のレースが終わった瞬間は脚を叩いて悔しがったが、間もなく笑顔に。普段は、はしゃくごとのない田畑選手が「一回やってみたかった」と抱きついてきた。48歳のコーチが相好(そうごう)を崩した。(羽田コーチは)山中湖村出身で吉田高校卒業と同時に地元の名門、富士急に入部。選手としては大成せず、90年にコーチに。田畑選手はその3年後に入社。(中略)2002年ソルトレークシティ五輪後に人事異動でスケート部を離れ、ゴルフ場勤務に。「要らないと言われたも同じ」スケートへの思いを断ち切れず、翌年退社を決めると田畑選手も会社を離れた。今の所属先ダイチ(富山市)が見つかるまで約1年間、貯金を切り崩して練習を続けた。手にした銀メダルには師弟の意地がこもっている。田畑選手は「監督(羽田コーチ)との出会いはまさに一期一会」と感謝する。

(以上引用)

「努力は必ず報われる」というようなことばでは片付けられない、筋書きのない人生ドラマです。本当に良かった、お疲れ様、そして日本中に感動をありがとう。